

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニヤーニヤー泣いていた事だけは記憶している。

吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獐悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかつたから別段恐しいとも思わなかつた。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあつたばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間といふものの見始であろう。この時妙なものだと思った感じが今でも残つてゐる。第一毛をもつて裝飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで薬缶だ。その後猫にもだいぶ逢つたがこんな片輪には一度も出会わした事がない。のみならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぶうぶうと煙を吹く。どうも咽せぼくて實に弱つた。これが人間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。

この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのを自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思つてはいるが、どさりと音がして眼から火が出た。それまでは記憶しているがあとは何の事やらい

くら考へ出そうとしても分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。その今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考へて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考へいた。ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて來た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入つたら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかつたなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。この垣根の穴は今日に至るまで吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路

になつてゐる。さて邸へは忍び込んだもののこれから先どうして善いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るという始末でもう一刻の猶予が出来なくなつた。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考へるとその時はすでに家の内に這入つておつたのだ。ここで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機会に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いやこれは駄目だと思つたから眼をねぶつて運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出来ん。吾輩は再びおさんの隙を見て台所へ這い上つた。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されても這い上つては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになつた。この間おさんの三馬を偷んでこの返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この家の主人が騒々しい何だといながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げる主人の方へ向けてこの宿なしの小猫がいくら出しても出しても御台所へ上つて來て困りますと。主人は鼻の下の黒い毛を撫りながら吾輩の顔をしばらく眺めておつたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつ

たまま奥へ這入つてしまつた。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女は口惜しそうに吾輩を台所へ抛り出した。かくして吾輩はついにこの家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書斎に這入つたぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思つてゐる。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし實際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書斎を覗いて見るが、彼はよく昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に涎をたらしている。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帶びて彈力のない不活潑な徵候をあらわしている。その癖に大飯を食う。大飯を食つた後でタカジヤスターを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に楽なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事はない。それでも主人に云わせると教師ほどつらいものはない。そうで彼は友達が来る度に何とかかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外のものにはは

なはだ不人望であつた。どこへ行つても跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかつた。いかに珍重されなかつたかは、今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の膝の上に乘る。彼が昼寝をするときは必ずその背中に乘る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかつたからやむを得んのである。その後いろいろ経験の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天気のよい昼は椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは夜に入つてこここのうちの小供の寝床へもぐり込んでいつしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寝る。吾輩はいつでも彼等の中間に己れを容るべき余地を見出していくにか、こうにか割り込むのであるが、運悪く小供の一人が眼を醒ますか最後大変な事になる。小供は——ことに小さい方が質がわるい——猫が来た猫が来たといつて夜中でも何でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神経胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現にせんだつてなどは物指で尻べたをひどく叩かれた。吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればするほど、彼等は我儘なものだと断言せざるを得ないようになつた。ことに吾輩が時々同衾する小供のごときに至つては言語同断である。

自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつついの中へ押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手出しをしようものなら家内総がかりで追い廻して迫害を加える。この間もちよつと畳で爪を磨いだら細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。台所の板の間で他が顛えていても一向平気なものである。吾輩の尊敬する筋向の白君などは逢う度毎に人間ほど不人情なものはないと言つておらるる。白君は先日玉のような子猫を四足産まれたのである。ところがその家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てて來たそうだ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戦つてこれを剿滅せねばならぬといわれた。一々もつともの議論と思う。また隣りの三毛君などは人間が所有権という事を解していないといつて大に憤慨している。元来我々同族間では目刺の頭でも鱗の臍でも一番先に見付けたものがこれを食う権利があるものとなつてゐる。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴えて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は毫もこの観念がないと見えて我等が見付けた御馳走は必ず彼等のために掠奪せらるのである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が食い得べきものを奪つてすましている。白君は軍人の家におり三毛君は代言の主人を持つてゐる。吾輩

は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に閑すると両君よりもむしろ樂天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思い出したからちよつと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といって人に勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつてほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謡を習つたり、またあるときはヴァイオリンなどをブーケー鳴らしたりするが、気の毒な事には、どれもこれも物になつておらん。その癖やりますと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謡をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられていふにも関せず一向平氣なもので、やはりこれは平の宗盛にて候を繰返している。みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。この主人がどういう考になつたものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰つて來た。何を買つて來たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間というものは毎日毎日書齋で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰に

も鑑定がつかない。当人もあまり甘くないと思つたものか、ある日その友人で美学とかをやつてゐる人が來た時に下のような話をしているのを聞いた。